

第 25 回(2009.10.18 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「季節」

日本の旧暦は、「太陰太陽暦」である。これは以前にもふれたが、イスラム教世界で使用している純粋な太陰暦では、太陽暦とおよそ 11 日のズレがあるから、季節が一定しない。そこで、閏月を入れた太陰太陽暦が日本では使われた。しかし、それでも暦の日付と季節のギャップは大きかったので、古代中国では一種の季節カレンダーが作られた。それが二十四節気で、冬至を起点にして黄道(天球上の太陽の通り道 = 地球上から見ると太陽の方が天球上を回っているように見えるため)を 24 等分したものである。

(春): 立春、雨水、啓蟄、春分、清明、穀雨

(夏): 立夏、小満、芒種、夏至、小暑、大暑

(秋): 立秋、処暑、白露、秋分、寒露、降霜

(冬): 立冬、小雪、大雪、冬至、小寒、大寒

この漢字から、おおよその意味がわかるが、春の啓蟄(けいちつ)は、暖かくなって虫が土中から出てくることを意味しているし、芒種(ぼうしゅ)は芒(のぎ)というトゲのような突起を持ったイネ科の植物の種まきをすることを意味している。また、二十四節気をさらに 5 日ずつ三つに分けて、「七十二侯」を表したが、これらの名称は旧暦の時代に付けられたものだから、立春といっても寒い 2 月だし、立秋といってもまだ残暑厳しい 8 月のことである。二十四節気の「気」は陰陽五行説の「気」であって「季」ではないから、気を付けようなどと、第 8 回「2 月は節分」で詳しく紹介した。

暑さ寒さも彼岸まで(彼岸会)

暑さ寒さも彼岸(ひがん)まで、という言葉があるが、彼岸は季節の区切りをいう。彼岸は年に 2 回あって、春分の日、秋分の日をそれぞれ「中日」として、前後 3 日間の計 7 日間をいう。始まりの日を「彼岸の入り」、終わりを「彼岸の明け」という日本独自の仏教行事である。この日、お寺では、彼岸会の法要が営まれる。家庭では仏壇をきれいにし、花と牡丹餅(ぼたもち)やおはぎを供え、家族そろってお墓まいりをするが、ちなみに、春の彼岸には牡丹にちなんでご飯を漉し餡で包んだ牡丹餅、また秋の彼岸には萩にちなんで、ご飯を粒餡で包んだおはぎを供えるところが多いようである。

仏教では、一切の衆生を救う阿弥陀如来は西方の浄土にいるが、春分の日と秋分の日には太陽がまっすぐ西に沈むから、この日念仏を唱えれば阿弥陀如来に届き、極楽に往生できるという。この彼岸というのは、古代インドの言葉で、般若心経の一節にある波羅蜜多(ハーラミータ)が語源であって、「彼岸に至る」という意味である。彼氏の待つ向こう岸に会いに行く、などというバカな娘がいたら引っぱたいてやろう。彼岸というのは、私たちが住んでいる煩惱や迷いの世界を「此岸(しがん)」というが、それに相対する言葉で、仏、悟りの世界をいう。つまり、簡単に言えば念仏を唱えて悟りの世界に行こうというのが「彼岸会」である。彼岸会は宴会じゃないんだから「ひがんかい」と読んではいけない。彼岸会の会は「え」と読んでほしい。神聖な仏法の話なのだから、「え！」などと下らない駄洒落をいう奴には仏罰が当たるぞ。

太陽の復活を願って(夏至と冬至)

「夏至(げし)」も「冬至(とうじ)」二十四節気の一つで、1年で一番昼が長い日が夏至である。およそ6月21日ころだが、日本は北半球に位置しているから、南半球では当然1年で一番昼が短い日になる。フィンランドをはじめバルト海沿岸地方などの北ヨーロッパでは、ふだんから太陽光線が弱いので、この日を歓迎して盛大な祭りが行われる。特に北極圏に近い地域では、この日は地平線上に太陽が一日中現れて、夜も昼と同じ白夜という現象が起きる。イギリスで有名な巨大な石で造られた謎の構造物「ストーンヘンジ」は、夏至の日は正面と思われる石の頂点を朝日が昇ることから、古代人の暦または日時計もしくは天文台だったのではないかと、ともいわれている。こういった石の構造物は、日本にも「環状列石」とよばれて、これまで北海道や東北地方で多く発見されている。ちなみに、イギリスのストーンヘンジは非常に有名だが、ウッドヘンジなるものも存在していることはあまり知られていない。文字通り木で出来た環状列木である。最近の学者の中には、木は現世を、石は死後の未来を表しているという説もあるようだ。その根拠は、ウッドヘンジは集落の近くにあり、地下から人骨が発見されるが、ストーンヘンジは集落から離れた地にあり、人骨が発見されていないことによるという。

夏至に対して、1年で最も昼が短くなる日を「冬至(とうじ)」というが、およそ12月22日頃である。第3回「11月は勤労感謝の日」でふれたように、古代人たちは、太陽の力が衰えて人間の魂も仮死状態になるが、再び復活すると信じていた。これを「一陽来復」といい、太陽の復活を願った行事が行われるようになった。わが国では、囲炉裏の火を新たに起こすことにより太陽を復活させることを現し、この火によって湯を沸かし、柚を浮かべて、柚の精と新しい火の力によって人間も復活するといわれた。だから、人は死ぬと復活を願って火葬されるのであるといった人がいるが、これは真っ赤な嘘である。一般には、衛生問題などで火葬にすることが法律で定められている。また、人間は死ぬと「土に帰る」という言葉があるが、今ではこの言葉は死語になった。最近の火葬場では、環境問題から煙も出ないから、ただの空気になってしまう。まさに仏教でいう「空(くう)になる」のだといった人がいるが、それも意味が違う。

戦後の子供はカボチャの子(冬至の風習)

現代でも、昔からの冬至の風習がいくつか続いており、たとえば、柚湯だが、柚は、融通が利くという洒落から、また冬至は湯治に通じることから、江戸時代になって流行した。ほかにも、冬至にはカボチャを食べる風習もあるが、そのルーツは新米の収穫に感謝して粥を食べる冬至粥からきているといわれている。カボチャはカンボジアが語源だが、当時は珍重されていたから、神に捧げて食したことがその理由だったと思われる。また、カボチャはカロチンやビタミンが多量に含まれていて、栄養価の高い食べ物だから、冬のビタミン不足を補う重要な食品であり、厄よけとして神に捧げられたものだろう。

漫才などで、軽い乗りで「ぼけ！」などと相手を突っ込むことがあるが、ときにはその後に茄子やカボチャを付けて「ぼけ(唐)茄子!」、「ぼけカボチャ!」などということがある。カボチャは唐茄子ともいい、単なる語呂合わせだろうが、カボチャに大変失礼な話だ。太平洋戦争の直後、食糧難で米が満足に食べられなかった時代は、日本人はサツマイモやカボチャが主食だった。終戦直後に生まれた、現在およそ50歳代くらいのほとんどの人は、サツマイモやカボチャの力で生まれてきたようなものだ。だから、それらの人たちの子供や孫はサツマイモやカボチャの子供だ、といった人がいたが、その理屈でいけば、若者がぼけ茄子だのカボチャなどとバカにしているのは、自分自身や自分の親をバカにしているのと同じなのだ、と肝に銘じておかなければいけない。